

稲葉真弓

ENDLESS

WALTZ

エンドレス

稲葉真弓

エンドレス
ワルツ
ENDLESS WALTZ

河出書房新社

エンドレス・ワルツ

一九九二年三月一九日 初版発行
一九九二年九月二五日 二版発行

著 者 稲葉真弓

装 幀 東 芳純

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二一三二

電話 三四〇四一二〇一(営業)
三四〇四一八六一(編集)

振替口座(東京) 〇一〇八〇二

印刷 大日本印刷株式会社

製本 小高製本工業株式会社

©1992 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります
落し本・乱丁本はお取替えいたします
ISBN 4-309-00746-5

稲葉真弓(いなば まゆみ)
一九五〇年、愛知県生まれ。
一九七三年、「蒼い影の傷み
を」で婦人公論女流新人賞受
賞。一九八〇年、「ホテル・ザ
ンビア」で作品賞受賞。一九
九一年、「琥珀の町」で第一
〇四回芥川賞候補。一九九二
年、本作品で第三十一回女流
文学賞受賞。

エンドレス・ワルツ 目次

一九八六年二月	5
一九七三年八月	11
一九七三年 晩夏	45
一九七四年二月	60
一九七六年四月	75
一九七七年 夏そして……秋	97
一九七八年九月	111
一九七八年以後	120
一九八六年二月	143
あとがき	148

エ
ン
ド
レ
ス
・
ワ
ル
ツ

一九八六年二月

こうして坐りながら死んでいるのだ。わたしは平面になる。

汽車の音が耳の中でゴーゴー響く。 出発 出発！

シルヴィア・プラス

今日もカオルに会った。彼が死んでからもう七年以上にもなるのに、まだ私は、真夜中の時間をカオルと過ごす。部屋の壁にもたれかかったカオルは、いつものように少し首をかしげ、眠そうな目で私をじっと見ていた。

「寒くない？」カオルは尋ねる。私は黙って首を振る。寒がっていたのは私ではなく彼のほうだ。彼はたいてい、体をすぼめていた。たぶん、薬のせいだ。それとも彼の中の過剰な熱が、体温を奪うのか……初めて会ったときも彼は寒そうな目と、寒そうな様子をしていた。そのときと同じ顔で、毎晩私の部屋に現れるのだ。

いつものジーンズをはいている。くたくたの白いＴシャツを着ている。気に入って何年もはき続けたスニーカーを身につけ、彼は私に囁く。「君の生き方は間違っている」

いったいカオルは私になにを望んでいたのだろう。走り続けること、その速度だけが問題だと言いつつ続けたくせに、速度をどう操ったらいいのか教えようとはしなかった。

「寒くない？ 君は寒そうに見える」

もう一度カオルは言う。私の心を覗き込むようにしてしばらく同じ姿勢で壁にもたれ、それからすつと消えていった。何年も向き合っていたような気がした。何十年も、産まれる前から向き合っていたような名残りがあった。体も心もちくちくした。この痛みはたぶんいつまでたつても消えないだろう。薬を飲むときだけ痛みは消えたが、もう私は薬をやっていない。消えていったものは、カオルだけではないのだ。街の熱気も、周りにあった音も、薬を分けあった人々も全部消えている。

カオルの言うように寒がつているのは私かもしれない。震えながら私は立ち上がる。朝から雨が降り続いていた。具合が悪くて今日も外に出なかった。神経が過敏に外の音や匂いに反応するのだ。

六畳の部屋は暗く、窓の外が少しだけ明るんでいる。いつからか、今日が何曜日か、

何月何日なのか数えなくなった。暖かいか寒いかな、雨か晴れか、一日は穏やかに平坦に色が薄く続いている。体をまかせて、私は走るふりをしてのろのろと歩いている。昔の速度がどんな速度だったか、ふと立ち止まることはあってもその速度を思い出せない。それとも私は、あんまり速い速度に慣れ過ぎて、もう普通の速度では歩けなくなっているのだろうか。

世界はいつも真っ白に見える。清潔な白ではなく、虚ろでどこまでも突き抜けていきそうな白だ。温度がない。感触がない。それでいて私の中には、いつも得体の知れぬ怒りがあるのだ。それをどこに吐き出したらいいのかわからない。

絶望でもなく、諦めでもない。これはなんだろう。掴みたくても見えないのだ。カオルの熱さをいつも掴もうとして結局掴み切れなかったように、いらいらした熱いものは絶えず私の周りを渦巻きながら、消えていく。

ひよっとしたら私は、憎しみをこの手で掴みたがつているのかもしれない。いつも憎しみを感じているくせに、だれを憎んでいるのかわからなくなる。私は会う人ごとに言う。『カオルを憎んでいる。彼のことを思うと鳥膚が立つてくる』と。じつさい私は、カオルとの暮らしを人に話すとき、膚が粟立つような思いに襲われる。なのに私は、

夜カオルが部屋にやってくるとき、彼を抱き締めたくてたまらなくなる。胸一杯に彼を抱き締めて、何度も何度も体をさすってやりたくなるのだ。憎んでいたものはカオルではないのかもしれない。憎んでいるものがよくわからないから、カオルを憎むふりだけをしてきたのかもしれない。

カーテンを引く。汚れた窓ガラスが濡れていた。向かいの道路の蛍光灯の光が、水滴を青く透き通ったガラス玉のように見せていた。筋を引いて、何本も水の滴が流れ落ちる。窓を開く。雪だ。いつの間に雨が雪に変わったのか、カオルと向き合っている間にも降り積もっていたに違いない。

真つ白な世界に見とれる。見とれながら、私はまたカオルの声を聞いたように思う。汚れきった金色のアルト・サクスを吹き鳴らしながら、彼は回らぬ舌でよく同じことを言っていた。葉をやっているときの彼はいつも幸福そうだった。そのただ中にいるとき、彼はひどく子供っぽく無防備に見えた。彼は言った。

「僕は北へ行くんだ。まだだれも行つたことのない極北。そこには熱はない。音を消すこと……すべての熱を奪う音を出すこと」

だからカオルはあんなにも寒がっていたのだ。いつも北だけを目指していた。熱のな

い場所、熱を奪う場所……それが彼の求めただひとつの場所だったのだ。

向かいのマーケットの、ネオン看板のピンクの光が白い路上ににじんでいた。不思議な安堵が押し寄せてくる。カオルの気配が間近にあった。寒そうに震えている彼の肉体の形までもがはつきりと感じられた。ふいに涙が出てきた。

雪は美しい。音を消す。カオルが望んでいたものは、このしんとした気配だろうか。

どこからかすかに音が聞こえ、それは人声でもなく車の音でもない。全ての音を消す、雪の、雪そのものの音だ。

「踊ろうよ。ワルツがいいね」私は言う。昔、私はカオルと二人、踊り続ける幻を見たことがある。もう死んでいるのに、なぜこんなにも軽く、いつまでも踊れるのだろうかといぶかしみながら、私は幻の中で彼と踊っていた。

手を差し出すと、窓枠から垂れた滴が私のセーターの袖を濡らした。

「踊れば寒くないよ」私は言う。言いながら、もうこの世界ではだれとも踊ることはないので知っているのだ。昔のように葉があれば、一人でも踊れるだろうかと思う。

窓を閉め、部屋の電気を消す。仄かな明かりが、カーテンを透かして部屋の中に射し込んでくる。こんなに雪は明るかっただろうか。青白い光だ。その光をぼんやりと眺め

ながら、もう私のいる場所は、この世のどこにもないと思う。踊り続ける場所なんて最初からなかったのだ。走って走って、走り続けて、いつたい私はどこにたどり着いたのだろう。私はふと思う。ここが北なのかもしれない。北は、いつも私とカオルの足元に、手に届くところにあつたのだ。

一九七三年八月

愛は影なのだ。

何てよく嘘をつき　そのあとで泣くのだろう。

シルヴィア・プラス

湿った夏の闇が街にあふれていた。腐ったごみの臭い、濡れたまま乾かないぼろ雑巾のような闇が、じつとりと膚にからまりついてくる。

今日も一日ラリっていた。朝起きると、いやな苦みが口の中にあって、どこかまでもどんと見えた。私は絶望的な気分です。頭をふる。いつだってそうだ。朝になると、昨夜何錠薬を飲んだのか覚えていないのだ。煙草を吸いながら、コーヒーを飲みながら、街を歩きながら、ときに私は二錠、三錠と口に白やピンクの小さな錠剤を放り込んでいく。自制心とか、警戒心とかが抜け落ちているのだ。そのせいか私はいつも白痴っぽく

見える。

薬をやり過ぎた翌日の朝は、猛烈な哀しみに襲われる。ざらついた舌や、灰色の膜をかぶった脳の隅々がどろりと溶け出して、もう後には戻れないという気分になる。その気分を忘れたくて、またも薬の箱をポケットやバッグの中にまぎぐるのだ。

街にはホットパンツの少女があふれ、レコード店では少し流行遅れのジョン・デンバーが「故郷に帰りたい」と歌っていた。街頭のテレビは、押すだけのエア・ポットのコマーションを流している。私は泳ぐような足取りで街を歩いていく。

昨夜もそうだった。重い頭を抱えて部屋を出て、喫茶店に入りコーヒを飲み、ロックスを聞かせる店で何時間もねばり、そのあとふらふらと新宿区役所通りをさまよい、「アニー」の扉を押す。その時間の私は、とうに不快な気分を忘れ、心地良く酔っている。もう何錠飲んだのか記憶にないのに、無限にこの酔いを続けたい高揚の中に放り込まれている。入り組んだ路地のすえた臭い、排泄物の臭いが満ちた街の懐かしさに足もとがよろめく。

「アニー」に入ると、私は汗ばんだ腕に力をこめて、手の平の中に何錠もの薬を握り締める。ヨウやエーコに向かって真つ赤な唇を突きだし、にっと笑いかけずにはいられない。

い。

「ご機嫌じゃない」カウンターのの中からヨウが言う。ヨウは、この店のアルバイトだ。芝居狂いの美しい男の子。縮れた柔らかな髪や額の感じが「俺たちに明日はない」のウォレン・ビーティーに似ている。

ヨウと知り合ったのは池袋の小さな芝居小屋だ。その小屋ではどういうわけか彼は「ピエロ」と呼ばれていて、自作の下手な詩を朗読していた。真つ黒なタートルネックのセーターと、真つ黒な細いズボンが、ぞつとするほど似合っていた。彼は詩を読むとき、白い額にひくひくと神経症の皺を寄せ、心底悲劇的な顔をするのがうまかった。

初めてヨウを見た夜、私は瞬間的に彼に恋をし、小屋を出るとき素早く電話番号を覚えていた。あれから何度寝たかもう覚えていないが、今はただの友達だ。何度も寝た男と友達になる……。そんな男が私の周りには何人もいる。最初に欲しがるのはいつも私のほうなのに、男に忘れられ、捨てられるのもいつも私のほうだ。それでいて私は、男と別れる瞬間の甘美なうずきだけを覚えていて、また別の男と同じことを繰り返す。人生はメトロノームだと、だれかが言っていたが、そのメトロノームを止める方法なんてだれも知らないのだ。

ヨウの傍らでは、エーコがもう酔っぱらっていた。私とエーコはカウンターの上で互いの指をからませる。

「こいつ、どこの産？」

「原宿」

エーコはそつと手の平のくぼみに視線を走らせ、満足げに唇を引き上げる。鑑識眼の確かなヤク中患者が、にっと笑いながら相手の顔を見るとき、たいていはそのブツに関心を示している証拠なのだ。彼女は一粒をカリツと音たてて嚙むと、肩をすくめた。

「悪くないじゃない。やけに安売りする店だね」

「顔だよね」

言いながら私は、古びた店の生白い中年女の顔を思い出している。あの目立たない店には何度か通った。睡眠薬や筋肉弛緩剤を大量に買う私を覚えていないはずはないのに、女はいつも無表情だ。ハイムール、ハイミナール、オプタリドン、ニプロール、ノルモレスト、プロバリンなどなど。私の体はたぶん白い粉やピンクの粉を吸い過ぎて、ぶよぶよとむくんで見えることだろう。なのに女は「ソーマニール百二十錠ください」と言っても、決して眉を寄せたり顔をじろじろと眺めたりはしない。むしろ客の顔から目を